

美人画家 東郷青児の蒲田時代

鍋谷 孝

東京大田区久が原の商店街にある洋菓子店の包装紙を見たときに、どこかで見たことのある美人画だと思いました。その絵が東郷青児だと思いつくには時間はかかりませんでした。モダンな美人画を描く洋画家であり、二期会理事長でもあった東郷青児。芸術院賞も受賞しています。

その東郷青児が、大正時代から昭和初期にかけて蒲田に住んでいました。きっかけは、蒲田に住んでいた洋画家中川紀元の交流から知ることができたのです。蒲田在任期間は、パリ留学前後でした。

一九二〇年（大正九年）府下蒲田村大字北蒲田五九七番地に転居（現蒲田中学付近）、さらに一月後、蒲田村大字一四九三番地へ転居届を出しています。（現東蒲田中学付近）松竹キネマ撮影所が開所された年でもありませんでした。その後、パリへ留学、一九二八年（昭和三年）、シベリア経由より帰国後、妻子と新居を構え、府下蒲田新宿二一九二 現大田区産業プラザ周辺に住んでいたようです。



写真は、東郷青児デザイン包装紙
洋菓子店 フラマリオン（久が原）

東郷青児は、「私の履歴書」（文化人六 日本経済新聞社刊 昭和五八年二月一日刊）で、蒲田の記憶についても書いています。「その後、私と明代さんは、形ばかりの式を済ませて、東京の蒲田へ移り住むこととなった。文字通り赤貧を洗うような生活で、たまに伝手を求めて絵を売るくらいが関の山だったが、そのころを振り返っても、なんとなく明るい思い出の連続で、貧苦に追われた深刻な記憶など少しもないのはなほだ不思議である。（中略）その当時の蒲田は、有名な蒲田の菖蒲園があり、蒲田一面が無数の池の連続で、水郷のようなものだった。」

そして、蒲田を離れた東郷青児は、心中未遂事件を起こしたのち、宇野千代と出会い、彼女との新生活に向かうことになるのです。

参考文献

東郷青児の年譜（中島啓子編生誕二二〇年東郷青児展図録 東郷青児損保ジャパン日本興和美術館編集産経新聞社刊二〇一七刊）

「私の履歴書」（文化人六 日本経済新聞社刊 昭和五八年二月一日刊）

取材協力 洋菓子店フラマリオン 中川直樹氏
住居調査協力 廣瀬達志氏